

## 翻訳：

イブン・アラビー『マッカ開扉』第167章

「幸福の錬金術」翻訳（上）

Japanese Translation of Ibn ‘Arabī’s *The Meccan Openings*  
(*al-Futūḥāt al-Makkīyah*), Chapter 167:  
“The Alchemy of Happiness” Part 1

藤原 路成

Michinari FUJIWARA

## 解題

以下に訳出するのは、「最も偉大な師範 (al-shaykh al-akbar)」イブン・アラビー (d.1240) の主著『マッカ開扉 (al-Futūḥāt al-Makkīyah)』に収められている「幸福の錬金術 (Kīmiyā’ al-sa’ādah)」と題された章の前半部分である。『マッカ開扉』は『叡智の台座』と並んで、イブン・アラビーの主著とみなされている書物であるが、全 560 章に及ぶ大部の書物であり、本邦においても具体的な内容はほとんど紹介されてこなかった。そのなかでも本章は、昇天 (ミウラージュ) を取り扱ったものとして比較的良好に知られている<sup>(1)</sup>。

イスラームにおける昇天とは、預言者ムハンマドがマッカから天界へと飛翔し、7つの惑星を巡ったとされる伝説、およびその物語に範をとった同様の天界飛翔譚を指す。預言者の昇天は621年 (ヒジュラ暦元年) に起こったとされており、クルアーンの17章1節には次のように記されている。「称えあれ、その下僕を夜に (マッカの) 禁裏モスクから、われらがその周囲を祝福した最遠のモスクへと、われらが彼にわれらの諸々の徴を見せるために夜行させ給うた御方こそ超越者」。伝承によって多少の異同はあるが、おおむね一致しているところによれば、アッラーから遣わされた天使ジブリール (ガブリエル) に連れられて、天馬ブラークに乗った預言者ムハンマドは天界へと昇り、7つの天のそれぞれで先代の預言者たちに出逢い、最終的には神の御許に辿りついたとされている。預言者の昇天は、後代のスーフィーや神秘家たちによって取り入れられた。彼らは昇天が神的な知を得るための道程であると解釈したため、昇天は多くの神秘主義文学において描かれている。

---

<sup>(1)</sup> イスラーム文化圏をはじめとする地中海周辺地域における昇天文学については杉田 [1996] および花田 [1984] を参照。これらの論文でも、「幸福の錬金術」について簡単に紹介されている。

昇天を題材とした作品のなかでも特に著名なイブン・アラビーの「幸福の錬金術」は、大きくわけて2部構成になっている。第1節では、人間が目指すべき完全性が錬金術になぞらえられる。錬金術が神秘主義的語りのモチーフとなる作品は、ペルシアの神秘主義文学にも多くみられる [Schimmel 1982: 64]。また、ハサン・バスリー (d.728), ズヌーン・ミスリー (d.861), ジュナイド (d.910), クシャイリー (d.1072), ガザーリー (d.1111)らが錬金術を扱った作品を残している [Ullmann 1972: 149]。なお、「幸福の錬金術」という題名は、イブン・アラビーよりはむしろアブー・ハーミド・ガザーリーの著作として知られている。『宗教諸学の再興』の要約版とみなされている<sup>(2)</sup>、ガザーリーの『幸福の錬金術』はペルシア語で書かれているが、ペルシア語を解しなかったと考えられるイブン・アラビーも本書の存在を認知しており、『マッカ開扉』の第73章で預言者論に関連して言及している [al-Manṣūb 2010: 4: 271] (本稿の注23も参照)。

第2節では、錬金術・神秘主義における以上のような完全性が、代理者性 (al-khilāfah) に他ならないことが述べられる。代理者性とは、代理者 (khalīfah) であることを意味する単語であるが、ここでいう代理者 (ハリーフア, カリフ) とはスンナ派における預言者の4人の後継者 (正統カリフ) を指すのではない。そうではなく、アダムに代表されるような、アッラーからの指名によって選ばれる代理者である<sup>(3)</sup>。この代理者性の議論をきっかけとして、使徒性、預言者性および聖者性との関わりが述べられる。

その後、神知者 (追従者) と哲学者 (思弁の徒) の昇天が描かれる。この昇天によって辿りつくのは7天とさらに上位の世界である。なお、本論で訳出したのはハールーン (旧約聖書のアロン) のいる第5天までである。神知者とは、教導者たる預言者ムハンマドに従った者であり、他方の哲学者とは真理を知るためには理性だけで充分であると考え、誤りに陥った者である。預言者の昇天と同じく7天のそれぞれに預言者がいるが、神知者は預言者から、哲学者は惑星から、その領域に授けられた知識を得る。神知者には神的な教えが伝えられる一方で、哲学者は自身にはそれが無いことを知り、自らの過ちに気がつき、悲嘆にくれる。そして、この昇天が終わったならば、正しき信仰の道に入ることを誓う。哲学者の昇天の果ては第7天である一方で、神知者はそれを超えた、いわば神的な領域へと昇って行く。この領域については次稿で詳述する。

翻訳に際して底本として利用したのは、マンスーブ版 [al-Manṣūb 2010: 5: 474-506] である。なおペイルート版 [Shams al-Dīn 2006: 3: 406-428] も参照した。また適宜、英訳 [Hirtenstein 2017], 仏訳 [Ruspoli 1981], ペルシア語訳 [Khvājavi 2006] を参照した。クルアーンからの引用は中田訳に依ったが、文脈などを考慮して一部の訳語や表記を改めた。「彼に平安あれ」などの祈願文は訳しなかったが、アッラーに関するものは意識のうえ例外的に訳出した。段落わけは原則としてマンスーブ版に従ったが、一部英訳の段落わけ

<sup>(2)</sup>ただし『幸福の錬金術』には、『再興』にはみられない論点もあり、単純な要約とみなすことはできない。

<sup>(3)</sup>代理者としてのアダムの地位については澤井 [2020: 147-156] を参照。

に従った箇所がある。また、読みやすさのために、英訳に従って原文にはない節と項を設けた。アラビア語原綴の表記と、代名詞の指示対象などの補足を（ ）内に記し、読みやすさのために訳者の判断で付け加えた箇所は〔 〕で記した。

## 翻訳

### 第108部

慈悲深く慈悲あまねきアッラーの御名において

第167章 幸福の錬金術の神知について

#### 第1節

<p><small>エリクシール</small>                  妙薬 (al-akāsīr) <sup>(4)</sup>こそは存在の変成                  遠き者に神慮の妙薬を                  裁定とさだめによって                  分量を正しくせよ、秤は我らが法                  錬金術は定められた尺度                  思慮ある者なら気をつけよ                  さすれば清浄なる天使の位階へ辿りつき</p>	<p>変化を示す明証にして                  適切な秤でもって振りかければ                  遠き者から近き者へとたちまち変わる                  我は既に明らかにした、留意せよ                  「量 (kam)」は姿形の世界の数なのだから                  情動に思慮奪われぬよう                  人間の世界よりさらなる位階に昇らん</p>
---	---

錬金術とは、尺度や重さをもつすべての物体や概念——感覚対象であれ思惟対象であれ——における尺度や重さを専門的に扱う学知の云いであり、変容——すなわち、ひとつの実在 ('ayn) の状態を変化——させる力を持つ。それは自然的かつ霊的かつ神的 (al-ilāhī) 学知である。我々が神的と言うのは、鎮座 (al-istiwā') と垂示 (al-nuzūl), 共に性 (al-ma'īyah) <sup>(5)</sup>と、〔個々の神名の〕意味が異なっていたとしても〔同じく〕一者と呼ばれるものに対する神名の複数性の成立によるものである。

<p>巻き上げられた物と開かれた物の間にある                  我らの複合物はそれらの単純物に対して                  啓示は法となる規定をもたらし</p>	<p>ものは質と量とおなじく尺度の状態<sup>(6)</sup>                  侵されない神秘の特権によって高慢なり                  規定は懲悪と勧善のうちにある</p>
--	---

<sup>(4)</sup> 単数形は iksīr.

<sup>(5)</sup> 「彼こそは諸天と地を六日間で創り、それから高御座に鎮座し給うた御方。大地に入り込むものもそこから出るものも、また、天から下るものもそこに昇るものも知り給う。そして彼はおまえたちがどこにいこうとおまえたちと共にあらせられる。そしてアッラーはおまえたちがなすことについて見通し給う御方」(Q57:4)。

<sup>(6)</sup> 「そして復活の日、大地はそっくり彼の握りであり、諸天もその右手によって巻き上げられたものである」(Q39:67), および「そして、復活の日、我らは彼に書を差し出し、彼はそれが開かれているのを見る」(Q17:13)。

錬金術という学知は、妙薬に関する学知であり、それはふたつの分野に分けられる。すなわち、そのはたらきが、鉱物としての金の場合のように初めからその本体を錬成する (inshā') ものであるか、あるいは鉱物としての金に準ずる人工的な金の場合のように欠陥 ('illah) や病理 (marad) を取り除く (izālah) ものであるのかのいずれかである。これはちょうど、中庸を探求するにあたっての来世と現世のありかたのようである。

知れ、すべての鉱物はひとつの根源へと戻ると。その根源は本性上、完全さの度合い——すなわち金性 (al-dhahabīyah) ——に結びつくことを求める。しかし、規定 (あるいは性質、影響 al-ahkām) の様々な神名の影響 (athar) から生ずる自然的な事物であるので、その途中で夏の暑さ、冬の寒さ、秋の乾燥、冬の湿気のように、時や場所の性質の違いによって、諸々の欠陥や病理が生じる。また、鉱山<sup>7)</sup>の熱さや寒さといった地点 [の違い] によるものもある。つまりところ、欠陥 [の原因] は多いのである。

ある場所から別の場所への道程や移動のときに、また [天体の] ある転回の影響から別の転回の影響へと移るときに、これらの欠陥のうちのなんらかが [その鉱物に] 生じ、その場の力が支配的となったならば、その実体 (jawharatahu) を [それに相応しい] 在り方 (haqīqatihā) へと動かすような形相がその [鉱物の] うちに現れる。それは硫黄 (kibrīt) や水銀 (zi'baq) と呼ばれる。そのふたつは、結合や性交の結果として生じる鉱物にとっての両親であり、子に生じる欠陥のゆえにそのように呼ばれる。そのふたつが結合し性交するのは、金と呼ばれる、生まれの完全で高貴な実体を生み出すためであり、そのゆえに両親は名誉に与っている。というのも、その [完全さの] 度合いというのは、実体性という観点から両親のそれぞれが求めているものだからである。しかし、その根源は、神的領域 (ilāhīyāt) においては息 (nafas) <sup>8)</sup> であり、自然本性においては蒸気 (bukhār) である。一方、その両親は神事 (amr) であり自然本性でもある。

このこと (完全性) は両親が形相という観点ではなく<sup>9)</sup>、実体という観点から求めているものであると我々が言うのは、第一質料という実体 (al-jawhar al-hayūlā'i) における性質は形相のみに限られるものであるからである。[根源に] 生じる欠陥が鉱物のうちに発生し、[その根源を] 硫黄なり水銀なりへと変えたとき、我々は次のことも知る。その [硫黄と水銀の] 可能態において、——もし性質の中庸という影響の力を取り除いたり、その [あるべき] 道から逸れさせたりさせるような欠陥が起こらなかつたとしたら——そのふたつのあいだから生まれる子が、ふたつの実在をそれ自身へと変容させるものであることを。そして、そのふたつが完全さの度合い——すなわち、初めからそのふたつが求めているところの金——へと辿りつくことを。

それゆえ、両親が鉱物のうちで、その特定の鉱物の自然本性の性質 (hukm) と、時の自然本性の影響 (athar) を受け入れる性質によって、結合し性交したならば——それは、アッラーが人々を創造し (faṭara) 給うた本性 (fiṭrah) のように真つすぐな道のうえにある。だが両親こそ

<sup>7)</sup> 「鉱山」と訳した ma'din は「鉱物」と同じ単語であり、文脈に応じて訳し分けた。

<sup>8)</sup> ペルシア語訳では、これを魂 (nafs) としている。アラビア語表記ではどちらでもありえる。

<sup>9)</sup> ベイルート版には否定辞 *lā* がない。

が、子をユダヤ教徒にし、キリスト教徒にし、ゾロアスター教徒にするのである<sup>(10)</sup>。また同様に、時間による病理 (al-'arad) によって起こる鉱物の病理によって、片方の親の量性 (kammīyah) が多くなったならば、それによって自然本性のひとつが他のものたちを圧倒し、増加する。その一方で、圧倒している方との対抗によって残りのものは減ってしまう。それによって実体の性質が決まり (ḥakama), その性質の在り方のせいでそれを〔完全さから〕遠ざけ、中庸の道から逸らしてしまう。〔その中庸の道こそが〕完全なる黄金の有徳都市 (al-madīnah al-fāḍilah al-dhahabīyah al-kāmilah) <sup>(11)</sup>へとあなたを導いてくれるような目的地である。そこへ辿りついた人は、もはや欠乏へと至る変容を受け入れることはない。もしその性質が圧倒したならば、その実在を変転させ、その性質に従って鉄や銅や錫や鉛や銀の形相が現れることになる。

このことからおまえば、「創造されたものと創造されたものではないもの」(Q22:5) という至高なる神の御言葉を観想 (al-i'tibār) <sup>(12)</sup>において知るだろう。つまり、完璧な創造——これは金に他ならない——と完璧ではない創造——すなわちその他の鉱物——のことである。そのとき、7つの惑星のうちのいずれかの惑星の霊的存在 (rūḥānīyah) がそれを担う。それは、運行において〔神の命令に〕服従する惑星とともに進む、その天の天使のうちのひとりである。というのも、アッラーこそが創造主としての〔自らの〕命令によって、その実体の同一性 ('ayn dhālika al-jawhar) を残したまま、それを終極 (ghāyah) へと向けさせるからである。それゆえ、〔例えば〕鉄の形相を担うのは、第7天を運行するこの惑星に乗った天使である<sup>(13)</sup>。錫やその他の形相をはじめ、すべての鉱物の形相は、至高なる主が向けさせた、その〔鉱物を支配する〕特定の天や天球のうちにある惑星に乗った天使が担う。

「〔錬金術の〕工程を真に知っている者 (al-'arīf bi-al-tadbīr)」であれば、最も容易い方法を検討するだろう。逸脱した中庸なる自然的な流れへと戻すために最も容易い方法が、物体から欠陥を取り除くことであれば、それが最も相応しい。天文学者は惑星が、あるときは正しい位置にあり、またあるときは、ずれて——上であれ下であれ——逸れた位置にいるのを見る。「工程を真に知っている者」は鉄などに変えてしまった原因〔の探求〕に着手するが、彼はその塊 (al-jamā'ah) を支配しているのが、そのなかにある量性に他ならないことを知っている。そこで、増加しているものを取り除き、減っているものを増やす。これこそが医学 (al-tibb) である。それを実践し、知悉しているのが医者である。この行為によって、例えば鉄やその他の形相を取り除くのである。

<sup>(10)</sup> イブン・アラビーはしばしばこのハディースを引用している [SPK: 195]。

<sup>(11)</sup> この単語はプラトン『国家』の理想国家論に基づいている。『国家』はイブン・ルシュドなどのイスラム哲学者に影響を与えたが、そのなかで最も有名なのはファーラービーの『有徳都市の住民がもつ見解の諸原理』であろう。本作の翻訳と解題については、上智大学中世思想研究所・竹下政孝 [2000: 59-169] を参照。

<sup>(12)</sup> この世界に存在するものはすべて何らかの象徴、徴であり、隠れたものもあれば明白なものもある。観想 (i'tibār) とは、それらの象徴によって示されている高次のリアリティを読み解き、そこへ至ることである。詳しくは Gril [2007] を参照。

<sup>(13)</sup> 鉄は一般的に第5天の火星によって支配されるとされているが、イブン・アラビーはここでは寒と乾の性質をもつ土星を割り当てている [Hirtenstein 2017: 57 n42]。

〔その鉱物のあるべき中庸の〕道へと戻したならば、彼は〔その鉱物の〕健康状態の形成と確立を保持しようとし始める。病理が治るかもしれないが、それは回復期であり、〔再発を〕恐れる。それゆえ、食事を食べやすくし、隙間風 (al-ahwiyah) から守る。そのおかげで、その実体が金の形相を帯びるようになるまで真っすぐな道 (al-ṣirāt al-qawīm) を歩むだろう。〔金の形相がその鉱物に〕起こったならば、医者 の 領分 (ḥukm) から欠陥からも離れる。この完全さのあとに欠乏の段階へと再び墮落することはないし、それを受け入れもしない。仮に医者が試みたとしても叶わない。法官 (al-qāḍī) でさえ、自身が目撃したこの問題を裁くための明文 (naṣṣ) をもたない。

実のところ、その理由は法官が公正 (‘ādil) <sup>(14)</sup>だからであり、彼が裁くのは真理 (al-ḥaqq) の道から外れた者だけだからである。この金はその上に——つまり真理の道の上に——ある。彼に敵対する者にはまったく真理が向けられないため (lam yatawajjah lil-khaṣm ‘alayhi ḥaqq), いかなる理由によっても〔法官は〕彼を裁けない。これがその理由である。真理の道に従う者は裁き (al-ḥukm) の位階よりも高く昇り、諸物を裁くもの (ḥākim) <sup>(15)</sup>となる。これが諸々の欠陥を取り除くための道である。そのことを知っている者も、注意を促した者も、示唆した者も私は未だかつて見たことがない。あなたはこの章ないしは我々のことばにおいてのみ、それがわかるだろう。

この技芸を知っている者が任意の鉱物物体に振りかけるために、妙薬と呼ばれる精髓 (al-‘ayn) を生み出そうとしたならば、〔妙薬を〕受け入れる物体の自然本性が規定するところから従ってそれ (鉱物物体) を変転させる。〔そのような場合、〕薬はただひとつ、すなわち妙薬である。諸々の物体のなかには、妙薬が〔自身の〕性質に変えてしまい、妙薬の働きをする妙薬となるものがあるが、これは代員 (al-nā‘ib) と呼ばれている。これは、ほかの鉱物物体のうちにも存立し、自身の性質によって支配する。いくらでもいいのだが、妙薬の精髓のうちからたとえば1ディルハムの重さを取り上げ、なんでもいいのだが〔その妙薬の〕1000倍の重さをもつある物体に振りかけたとすると、それが錫か鉄であれば銀の形相を与え、銅か黒鉛か銀であれば金の形相を与える。もし〔振りかけられる〕物体が水銀であれば、その (妙薬の) 力を与え、代員〔の性質〕を残す。その性質が諸物体の性質を定めるが、それは、その他の諸物体の重さとは異なる重さによるものである。それは、妙薬<sup>(16)</sup> 1ディルハムの重さである。1ラトル<sup>(17)</sup>の叡智で精確に水銀に振りかけたなら、それ全体を妙薬へと変える。そして、妙薬のときのように、その代員から一定の量をその1000倍の重さの他の物体に振りかけたなら、性質においてそれと同じ役割を果たすようになる。これこそが生み出し／錬成 (al-inshā‘) のかたちであり、第

<sup>(14)</sup> 「公正」と「中庸」は√dl という共通の語根をもつ。

<sup>(15)</sup> あるいは、「規定・性質を定めるもの」とも訳すこともできるだろう。その場合、「裁き」は「規定・性質」と訳すべきである。錬金術師 (工程を真に知っている者) が法官に例えられており、欠陥のない中庸の状態が公正であるといわれていることから考えると、ḥukm は二重の意味で用いられている。

<sup>(16)</sup> 写本では、代員 (al-nā‘ib) に訂正されている [al-Mansūb 2010: 5: 477 n3]。

<sup>(17)</sup> 地域や時代によって量が異なるが、ディルハムの数百倍の大きさである。

一のものとは病理を取り除くことである。

この話を持ち出したのは、叡智が「ふたつの道の錬金術 (al-kīmiyā' bayna al-tarīqayn)」と呼ばれるものに結びついていること、そしてなぜ私が「幸福の錬金術 (al-kīmiyā' al-sa'ādah)」と名付けたのかをあなたに教えるためである。それは、そのなかには、永遠の幸福があり、さらには、一部のアッラーの民にとってこれより良いものはないようなものもあるからである。つまり〔錬金術は〕、男 (al-rijāl) <sup>(18)</sup>がもつ完全さの度合いをあなたに与えるのだ。すべての幸福な人に完全さが与えられるわけではない。それゆえ、完全さの持ち主はみな幸福な者であるが、すべての幸福な者が完全であるわけではない。完全さは最高次の度合いに到達することの云いであるが、これはかの根源への類似 (al-tashabbuh bi-al-aṣl) である。「男のうち完全な者は多い」という預言者の御言葉<sup>(19)</sup>が、〔一般の〕人々が述べるような完全さを意図していると想像してはならない。そうではなく、それは我々がすでに述べたところのものである。これらのことは、現世において知的天分 (al-isti'dād al-'ilmī) <sup>(20)</sup>が与えるものによる。この序文の後に幸福の錬金術について——アッラーが望み給うならば——語ろう。アッラーこそ仲裁者であり、彼以外に主はいない。

## 第2節<sup>(21)</sup>（人間が創造された目的である完全さこそ代理者性である）

知れ、人間が創造された目的であり求められている完全さこそが代理者性 (al-khilāfah) である。それはアダム (旧約聖書のアダム) が神慮 (al-'ināyah al-ilāhīyah) によって獲得したものである。これは、使徒における使徒性 (al-risālah) よりも特殊な階梯 (maqām) である。というのも、すべての使徒が代理者であるわけではないからである。使徒性の階位は特に伝達 (al-tabligh) のみである。いと高き神は「使徒に課されたものは伝達だけである」(Q5:99) と仰っている。背く者に対する統治権 (al-tahakkum) は彼にはない。彼にあるのは、アッラーからの法規定の立法化 (tashrī'), あるいはアッラーが特別に彼に見せ給うたものに則った〔立法化〕だけである。彼が遣わされた先の人々に対する統治権をアッラーがお与えになっていたとすれば、それは代理人としての指名 (al-istikhlāf) であり、代理者性であり、〔彼は〕使徒にして代理者で

<sup>(18)</sup> rijāl (単数形: rajul) は「男」を表す一般的な単語だが、イブン・アラビー思想においては、精神面において完全さを獲得した人を指す。男性だけでなく女性にも開かれている [cf. SPK: 395 n16]。

<sup>(19)</sup> *Ṣaḥīḥ al-Bukhārī* (3769) には以下のようなハディースが含まれる。「男達のうちには完全な者が多いが、女達で完全な者はイムラーンの娘マルヤムとフィルアウンの妻アースィヤのみ。また、アースィヤが他の女達に勝っているのは、丁度、サリードが他の食べものよりすぐれているようなものだ」[牧野訳 1994a: 296 ただし、一部の表現を変更した]。サリードは肉や野菜のスープにパンを浸した料理。

<sup>(20)</sup> 天分 (isti'dād) は、「準備状態」や「備え」とも訳される。なお、本稿でも文脈を考慮して「備え」と訳した箇所がある。天分、ないしほとんど同じ意味で用いられる受容 (qabūl) は、神の自己顕現 (tajallī) を受け入れる個々の存在者の能力を指す [SPK: 91-94]。なお、天分と受容の違いについては、『叡智の台座』のセト章を参照 [FH: 58-67]。自己顕現とは、被造物からは隔絶された絶対者である神が、被造物に対して自らを顕わすことである。これらのイブン・アラビー思想における基礎概念については、上述の SPK のほか、SDG および井筒 [2019] を参照。

<sup>(21)</sup> waṣl fi faṣl.

ある。それゆえ、すべての〔使徒として〕遣わされた人に統治権が与えられているわけではない。

もし剣を与えられ、〔剣を振るうという〕行為を実行したならば、そのとき彼には完全さがあり、神名の権力 (*sultān*) をもって現れる。彼は与え禁じ、威力を与え辱め、生かし殺し、害し益する。必ず、預言者性とともに相反する神名を伴って現れる。もし預言者性なしに統治権をもって現れたならば、それは王であり、代理者ではない。代理者というのは、真理なる神が下僕たちに対する代理者として指名した者に他ならないのであって、人々が擁立したり、忠義を誓ったり、指導者として認めたり、自身に対する優越を認めたりした者ではない。これこそが完全性の度合いである。

諸靈魂 (*al-nufūs*)<sup>(22)</sup>が完全さという階梯を得るために尽力することは聖法に則っている (*mashrūʿ*) が、預言者性を得るために尽力することはできない<sup>(23)</sup>。代理者性というのは獲得できる (*muktasabah*) かもしれないが<sup>(24)</sup>、預言者性は獲得することができない。しかし、一部の人間は、それへと至る道が規定の明らかなもの (*zāhir al-ḥukm*) であり、アッラーが望んだ者がそれを歩むのを見て、預言者性は獲得できると想像し、誤りに陥る。

〔とはいえ、〕その道が獲得できるものであることに疑いはない。もし門まで辿りついたならば、〔その人は、〕授権 (*tawqīʿ*) において定められたものに従った存在になる。ここにおいて、これこそが神〔から〕の選別 (*al-ikhtisāṣ al-ilāhī*) である。人々のなかには、聖者性という授権が授けられる者いれば、預言者性と使徒性という授権が授けられる者もいる。また、使徒性と代理者性の者もいれば、代理者性だけの授権が授けられるものもいる。この授権が授けられるのは彼らが行為・言葉・状態においてこの門までの道を歩んでからであるのをよそ者が見れば、それは下僕にとって獲得できるものであると想像し、過ちを犯すのである。

知れ、靈魂はその本体上、神による授権として授けられるものの天分を受け入れる準備があ

<sup>(22)</sup> 後述のように、ここでは部分靈魂 (*al-nufūs al-juzʿiyyah*) すなわち人間を指していると思われる。この箇所の *nufūs* を起点として、これまでの人間論から靈魂論に話題が移る。

<sup>(23)</sup> 「預言者性は人間 (*bashar*) が得ることができるアッラーのもとでの階梯である。だが、それは人間のうちでも偉大な者たち (*al-akābir*) に限られている。立法者でもある預言者に与えられ、この立法者でもある預言者の慣行 (*sunan*) を守り、追従した者に与えられる。至高なる神は『そして、我らは彼に、我らの慈悲から兄ハールーンを預言者として授けた』(Q19:53) と仰った。追従者に関してこの階梯を検討し、彼への追従によってこの階梯が得られたことが分かったならば、獲得できるもの (*muktasab*) であると呼ばれる。そしてこの追従による尽力が獲得と呼ばれる。だが、彼の主から、彼だけの聖法がもたらされるわけではないし、他の者へと結びつけるような聖法がもたらされるわけでもない。ちょうどハールーンがそうであったように。彼がそれに気づいたならば、我々は、この階梯に対して預言者性ということばを名付けていたが、この門を閉ざそう。一部の人間が導師アブー・ハーミド〔・ガザリー〕に関して信じていたように、このことばの名付けが立法の預言者を意図していると想像し、過ちを犯すことがないように。彼らは、彼が『幸福の錬金術』などで預言者性の獲得を主張していると言う。アブー・ハーミド〔・ガザリー〕が意図していたことは我々が語ったこととは別のものである〔と考える〕ことが神のご加護によってありませんように」[*al-Mansūb* 2010: 4: 271]。

<sup>(24)</sup> 「アッラーは、おまえたちのうち、信仰し、善行をなした者たちに、必ずや彼らにこの地で後を継がせる (代理者として指名する) と約束し給うた」(Q24:55) を示唆している。



る。それゆえある者には、特に聖者性という授権の天分だけが与えられるし、またある者には、我々が述べた諸階梯の天分を、すべてであれその一部であれ、授けられる。その原因は、いと高き神が「ひとり／ひとつの靈魂（nafs wāhidah）からおまえたちを創った」（Q4:1; 7:189; 39:6）と仰っているように、諸靈魂がひとつの鉱物から創造されていることである。肉体の創造への備えの後に<sup>(25)</sup>「彼に我の靈氣（rūhī）から吹き込んだ」（Q15:29）と仰った。ひとつの靈氣から、吹き込まれたもののうちに吹き込まれた神秘／内奥（al-sirr）が生まれた。それすなわち、靈魂<sup>(26)</sup>である。彼の「望み給うた通りのどのような姿形にもおまえを組み立て給うた」（Q82:8）という御言葉は、諸天分のことを意図している。それゆえ、神の命令を受け入れることにおける天分の性質によったものになる。

これらの部分靈魂（al-nufūs al-juz'īyah）の根源は、その父において清浄であり、この自然的物体の存在なしにはそこにはいかなる実在（'ayn）も現れない<sup>(27)</sup>。自然本性は第2の親であり、〔部分靈魂が〕混ざったものとして出てくる。そこには、物質から離存した純粋な光の照明も、自然本性の性質であるその終極的な闇（al-zulmah al-ghā'īyah）も現れない。

自然本性は鉱山に似ており、普遍靈魂は天球に似ている。〔天球には〕能動性／作用（fi'īl）があり、その運行のゆえに、元素には受動性（al-infi'āl）が生まれる。鉱山で生成された物体（al-jasad）は、人間の肉体（al-jism）と同位である。特性——すなわち、その鉱物的物体の靈氣——は人間の肉体に属する部分靈魂——すなわち吹き込まれた靈氣——と同位である。鉱物物体は、その精髓（a'yān）が現れる完全性の階位を求めているにもかかわらず、その生成過程で生じた欠陥のせいで複数の位階（al-marātib）に分かれている。ちょうどそれと同じように、人間も完全さのために創造されたが、その本体の根源においてであれ、偶有的諸物によってであれ、それらに生じる欠陥や病理によって、その完全さは損なわれる。そのことを知れ。

この章にふさわしいものについて述べることから始めよう。それは、次のように言うことである。アッラーが部分靈魂をこの肉体の経綸の王と為し、代理者となるよう指名し、そして自身を代理者として指名した創造主（mūjid）がいることに気づかせるために、〔靈魂が〕それ（肉体）における代理者であることを明らかにしたとき、自身を代理者に指名したかのものである知を求めることが必務となった。それは、自分と同類（jins）のものなのか、あるいはなんらかの点で類似点を挙げるができるような類似したものなのか、それとも全く似ていないのだろうか？かのもとの真知をもとめたいという欲求はひとりでに強くなっていった。

かのものへ辿りつく道をもとめようとするこの状態が変わらないことを我々は明らかにした。すると突然、存在において優越している人が部分靈魂のなかから現れた。その人は彼ら（部分

<sup>(25)</sup> 「まことにわれは、変質した黒土のからからの粘土/悪臭ただよう泥の粘土から人間を創る」（Q15:28）を指すものと思われる。

<sup>(26)</sup> マンスープ版では *nafas* となっているが、文脈を考慮し、英訳や仏訳と同じく *nafs* で訳出した。だが、*nafas* と *nafs* が同じ綴りで語根上の繋がりがあることをイブン・アラビーは明らかに意識している。

<sup>(27)</sup> 部分靈魂は、神的息吹（al-rūh al-ilāhī）を父、自然本性を母として生まれてくる。神的息吹は光である一方、自然本性はその光を受容する闇である [SDG: 303-4, 309-12]。

靈魂) に似ていたもので、親しみを覚え、こう言った。「あなたは这个世界 (dār) では、私たちよりも優れていますが、私たちとおなじようなことをあなたも考えたことがあるのですか?」。彼は「あなたたちは何を考えているのですか?」と答えた。「私たちをこの〔肉体という〕堂 (al-haykal) の経綸の代理者とされた方に関する知の探究です」と彼らが言うと、「私にはそれについて正しい知識がある。私はそれを、あなた方を代理者に指名し、私を我が同類たちへの使徒となされた方からもたらした。彼へと辿りつく知の道に彼らが気づくことができるように、彼はそうしてくださったのだ。そしてその道にこそ、彼らの幸福がある」と答えた。ひとり<sup>(28)</sup>がこう言った。「彼こそを私は求める。かの道を歩めるように私に教え給え」。もうひとり<sup>(29)</sup>はこう言った。「私とあなたに違いはない。彼の真知へと至る道は自分で導き出してみせよう。そのことであなたに追従したりはしない。あなたが何者でああなたがもたらしたものがなんなのか、思弁 (al-nazar) によってわかったのであれば、それは私にもあるのだから、どうして私があなただを模倣するほど熱情の欠けた人 (nāqis al-himmah) になろうか? もしかつては存在していなかったのに、その後彼が私たちに存在を割り当てたように、彼からの選別によってそれが得られたというのであれば、それは論拠なき言いがかりである」。それゆえ彼の言葉には目もくれず、自分の理性を用いて考え、思弁しはじめた。

これが、思考的思弁に基づく理性的論拠によって知を得る者の立場である。他方の者 (神知者) の例えは、使徒が伝えた創造主に関する知識に追従し、模倣する者たちの例えである<sup>(30)</sup>。そして、このふたりが追従することに関して意見を違えたかの人物こそ、教導者 (al-mu'allim) たる使徒の例えである。

この教導者について思弁したふたりの人物のうち的一方の人物——すなわち、彼に従わなかった方の人物——の思弁に見合う限りで、この教導者は、完全さと幸福という度合いへと至る道を明らかにしはじめた。しかし、彼 (使徒) と合致 (al-muwāfaqah) できたのは、自然的事物によって必然的に発生する性質 (ṭab') の相違の一部についてだけだった。また、性質の相違はすべて、特別な重さや特定の尺度 (wazn khāṣṣ wa-miqdār mu'ayyan) によるものである。計量や計り (al-taqdīr wa-al-wazn) が導入されるために、これは錬金術と呼ばれるのである。この人物がかのこと (使徒との合致) を見たとき、模倣ではなく独力でそのような結論に辿りついたことに喜び、使徒を模倣している仲間に対する優越感 (shufūf) を覚えたのであるが、この点で彼は過ちを犯したのである。模倣者 (神知者) はといえば、相も変わらず教導者の模倣をし続けた。他方、模倣者ではない者——すなわち先ほどの人物 (哲学者) ——は、〔既に使徒と〕合致していると思い込み、この人物への模倣と縁を切り、合致〔しているという思い込み〕のゆえに自身の思弁ひとつにかかりきりになった。

ふたりの男——両者ないし片方が女性だった場合にはふたりの人というべきだが——はこの

<sup>(28)</sup> 後で追従者と呼ばれている神知者のこと。

<sup>(29)</sup> 後で思弁の徒と呼ばれている哲学者のこと。

<sup>(30)</sup> 追従や模倣は正しい人や道に従うという意味であり、決して否定的な意味で用いられているのではない。

道を歩んだ。一方は思弁によって、他方は模倣によって。そして、ふたりは修養 (al-riyāḍah) を始めた。その修養というのは人徳の洗練 (tahdhīb al-akhlāq) や、空腹による肉体的苦痛に耐えるといった奮励 (al-mujāhadah), および、礼拝中に長く起立すること、辛抱強く礼拝を行なうこと、齋戒・巡礼・ジハード・旅といった肉体を用いた崇拜行為 (al-'ibādāt) である。一方は思弁によって、他方は立法者と呼ばれる師匠にして教導者が定めたものによって [それを行なった]。ふたりが元素的自然本性 (al-ṭabī'ah al-'unṣurīyah) という軀から逃れたとき、自身の身体が存在を保つのに必要な元素的自然本性のみを帯びるようになったのだが、その（身体の）存在、中庸および存続によって、これらの部分靈魂は求めていたものを、すなわち特別に彼らを代理者とし給うたアッラーに関する知を得ることができるようになるのである。

#### 第1項：アダムと月

ふたりが元素的自然本性による欲望 (al-shahawāt al-al-ṭabī'īyah al-'unṣurīyah) という性質から抜け出し<sup>(31)</sup>、最下天の扉が開かれたとき、模倣者はアダムに出会い、歓喜して隣に腰を据えた。思弁にかかりきりになった者は、月の靈的存在 (rūḥānīyat al-qamar) に出会い、そのもとに腰を据えた。アダムに仕える月——彼（アダム）への服従を真理なる神から命じられたという点で、[月は] 彼の宰相のようであった——の客人である思弁の徒は、それ（月）がもっている知識のすべてが、その下にある諸球 (al-ukar)<sup>(32)</sup> を超え出るものではなく、また、自身にはそれより上位にあるものについての知識が何もないこと、そしてその影響はそれよりも下にしか及ばないことを理解した。また、アダムには場所においてそれよりも下と上にあるものについての知があり、月には知ることができないようなものを自身の客人には教えているのを見て、[アダムが神知者に対して] もたらしているのが、まさしくかの教導者——すなわち使徒——の恩寵に他ならないことを知った。それゆえ思弁の徒は、かの使徒の道を歩まなかったことを悲しみ、後悔した。そして彼の信仰を受け入れ、その旅から戻ったならば、かの使徒に従い、彼のためにもう一度旅をやり直すことを誓った。アダムの客人であるかの追従者は、彼の体質 (mizāj) が保ちうると父 [なるアダム] が判断した限りでの神名について教わった。というのも、元素的肉体の構成 (al-nash'ah al-jismīyah al-'unṣurīyah) には、部分靈魂への影響があるが、そのすべてが受容においてひとつの位階にあるわけではないからである。それゆえ、これこれのものは他のものが受け入れられないようなものを受け入れるのである。

<sup>(31)</sup> 預言者の昇天は肉体を伴うことができるが、聖者などそれ以外の者の昇天は靈気だけによるものとされる。この昇天の際に身体から肉体の諸元素が分解され、靈魂だけになることを「分解の昇天 (mi'rāj al-tahīl)」と呼ぶ。注32で述べるように、月の下には（地球に近い順に）土、水、空気、火の球 (kurah) が存在する。これらの諸球を通り抜けるごとに、その球のもつ元素的性質が身体から剥奪される。この点に関しては『マッカ開扉』367章に詳しい。ただし、イブン・アラビー自身が「分解の昇天」ということばを使用しているのは、管見の限りでは確認できなかった。「イブン・アラビー学派」のひとりに数えられるアブドゥルカリーム・ジーリー (d. ca. 1428) はこのことばを用いている [‘Ajam 1999: mi'rāj al-tahīl]。

<sup>(32)</sup> 4元素が純粋なかたちで存在している球であるとされることが多い [Murata 1992: 135-9]。

第1天において、彼（神知者）はアダムの知から神の特殊な顔（*al-wajh al-ilāhī al-khāṣṣ*）<sup>(33)</sup>を知った。それは、アッラー以外のすべての存在者にあるのだが、アッラーがその原因や要因への理解を妨げているのである。思弁の徒にはその顔についての知が全くない。その顔についての知こそが、自然錬金術における妙薬についての知であり、これこそが「神知者たちの妙薬（*iksīr al-al-‘arīfin*）」である。だが、このことに私以外で気づいた者は見たことがない。このウンマ、いやアッラーの下僕たちに対して助言するよう命じられていなかったならば、私も語らなかつたらう。ふたりともがこの天球に含まれている4元素（*al-arkān al-arba‘ah*）と生成物（*al-muwalladāt*）のうちアッラーが定めた性質と、アッラーが「それぞれの天にその命令を啓示し給うた」（Q41:12）という御言葉でこの天に啓示し給うた特別な命令について知った。だが、月の客人である思弁の徒が知ったのは、肉体への影響と、元素的自然本性から構成された物体の実在の変成についてだけであった。

追従者はその（元素的自然本性）なかにある、部分靈魂に生じる神の知について得た。[そのような神の知のなかに含まれているのは] 特にこの天球にあるものとは何なのか、そのようなものに対して真理なる神の存在がもつ関係は何か、そのものどもうちに彼がもっている姿形とは何か、人間存在（*al-nash‘ah al-insānīyah*）、特にこの天の主として指名されたアダムに対する代理者性はどのような点において正当なものとなるのか、である。追従者は神の知における代理者性としての指名の在り方（*ṣūrat al-istikhlāf*）を知ったが、思弁の徒は、肉体の経緯における元素への代理者の指名（*al-istikhlāf al-‘unṣūrī*）、および増加、発達、成長、減少がそれを受け入れる肉体において発生する原因を知った。思弁の徒が知ったことはすべて追従者も知ったが、追従者が知ったことすべてを思弁の徒が知ったわけではなかった。それゆえ、思弁の徒はただ悲嘆に悲嘆を重ねたが、いつこの旅が終わり、自身の肉体に戻る<sup>(34)</sup>のか、正しい答えを出すこともできなかった。彼らはこの旅路において、あたかも夢を見ていながら自分がいま夢のなかにいると気づいている睡眠者のようである。だが、いつ目が覚め活動を再開するのか、いつ悲嘆から心安らぐのかについて確かなことは言えないのである。旅の途上で彼に訪れるものに締めつけられるのではないかとの恐怖に囚われ、それ以上先に進めなくなる。そしてまたそのことがいっそう彼を不安にさせるのである。追従者はこのようではない。知る人ぞ知るかの特殊な顔によって、どこにいようと上昇（*al-taraqqī*）が自身とともにあるのを見て取る。

アッラーがお望みのあいだずっと、この天に滞在した後、ふたりは〔再び〕旅を始めた。ふたりがそれぞれの接伴役に別れを告げると、靈氣のミウラージュ（*mi‘rāj al-arwāh*）によって第2

<sup>(33)</sup> すべての存在者はふたつの顔を持つ。すなわち、神と諸物の媒介となる原因に対して向けられる顔と、真理なる神自身へと向けられる顔である。人が歴史的な観点から自身の原因について考えるならば、それはアダムへと行きつく。また、非歴史的な観点からそれについて考えるならば、元素や天、神の高御座や第一理性などの諸々の存在者の階層に気づくが、それらは最終的にアッラーへと辿りつく。後者の顔においては、媒介物なしに存在そのものをみることになるが、イブン・アラビーはこれを「特殊な顔」と呼ぶ。これこそが、存在を与えるために諸物に対して神から向けられる「神の特殊な顔」であり、存在そのものである神に対して諸物の側から向けられる諸物の特殊な顔と同一である [SDG: 135-9]。

<sup>(34)</sup> 注31を参照。

天へと上昇した。この第1天においてそれ〔天使〕は神の7番目の代員（al-nā'ib）であり、人間の身体（al-nash'ah al-insānīyah）が現れる子宮の中で生成する精液を委ねられている<sup>(35)</sup>。精液の着床から7か月目において、それを委ねられている。この月の子供は胎児（al-janīn）であり、月の満ちに伴って母親の腹のなかで増大し成長し、月の欠けに伴って母親の腹のなかで動きが衰弱し減少する。それこそが徴表（al-'alāmah）である。もしこの月に生まれたならば、6ヶ月目に生まれた者のような潜在能力（al-qūwah）は持てない<sup>(36)</sup>。

## 第2項：イーサー、ヤフヤーと水星

ふたりが第2天〔の扉〕を叩き、〔門が〕開かれたとき、ともに昇った。追従者はイーサーのもとに行った。イーサー（新約聖書のイエス）のもとにはいとこのヤフヤー（新約聖書の洗礼者ヨハネ）<sup>(37)</sup>がいた<sup>(38)</sup>。思弁の徒は水星（al-kātib）のもとに行った。水星は彼を招き入れ、住まいを与えて歓待した後、彼に謝ってこう言った。「私を待たないでください。私はイーサー様とヤフヤー様の奉仕をしているのですが、あなたのお仲間がおふたりのもとにいるので、彼らのところに行って、お客様のためにおふた方が命じられたことを確認しないとイケないのです。用が済みましたら戻って参ります」。それゆえ思弁の徒は悲嘆に悲嘆を重ね、仲間の道を歩まず、彼の行く道（madh'hab）を行かなかつたことを後悔した。

追従者はアッラーがお望みになるあいだはふたりのもとに滞在した。クルアーンの模倣不可能性（i'jāz）という証拠によって、アッラーの使徒にして教導者〔である預言者ムハンマド〕の使徒性が正しいものであることを、ふたりは彼に理解させた。それ（証拠）は弁論と韻律の存在（ḥadrat al-khiṭābah wa-al-awzān）であり、ことばの配置の巧みさであり、主題の配合（imtizāj al-umūr）であり、ひとつの意味がさまざまなかたちにおいて現れることである。慣行破り（kharq al-'awā'id）の段階において識別（al-furqān）<sup>(39)</sup>が彼に訪れる。この次元において、乳香や

<sup>(35)</sup> 「至高なるアッラーは、天使たちに精液を着床している子宮を委ねた。それゆえ彼らは精液をある状態から別の状態へと変転させるのである。アッラーは彼らに聖法として定め、月々の変転の能力を授けた。至高なる彼は仰った。『子宮が減じるもの——通常の数より減るもの——と、それが——通常の数より——増すものをも。あらゆるものは彼の御許に定めのある量がある』(Q13:8)。彼こそが、あらゆる個体の特性、その作用、運動、静止の特性を知っており、それゆえ惑星の運動にそれを結びつけた」[al-Manṣūb 2010: 9: 309]。

<sup>(36)</sup> 妊娠期間として想定されているのは妊娠が明らかになってからの7か月であり、この期間が7惑星に対応している。それゆえ、胎児は7惑星のそれぞれを通過してきた後に生まれるとイブン・アラビーは考えている。

<sup>(37)</sup> ヨハネの母エリサベトとイエスの母は親戚であったとされる（ルカ 1:36）。

<sup>(38)</sup> 火星にイーサーとともにいるのがヤフヤーであるとする伝承もあるが、別の伝承によればザカリヤである [花田 1984: 158-9]。なお、『マッカ開扉』367章ではヤフヤーはイーサーとハールーンのあいだを行き来しているが、イーサーへの関係の方がハールーンへの関係よりもふさわしいとされている。

<sup>(39)</sup> ムーサーにも下されたとされる（Q2:53）識別（al-furqān）は、クルアーン中ではクルアーンの別名とされているが、イブン・アラビーにとっては特別な意味をもっている。イブン・アラビーにとっての「識別」は、絶対的の一者である神と自己顕現によって分岐した側面を識別することである [井筒 2019: 81-2, 382]。

血などではなく、文字や名前による実践に基づいた自然魔術 (al-sīmiyā) <sup>(40)</sup>の学知を知る。そこで彼が知るのは、単語の高貴さ、ことばの総合性 (jawāmi' al-kalim), 「在れ (kun)」の真相と、  
 [「在れ」という言葉に] 過去形でも未来形でも分詞でもなく命令形が当てられていること、  
 [kun の語根である√KWN が] 3つ [の文字] から構成されているにもかかわらず、[<sup>カーフ</sup> K と <sup>ヌーン</sup> N  
 の] 2文字だけが現れていること、K の文字と N の文字のあいだを仲介する媒介の (al-  
 barzakhīyah) 第3の語が何故削除されているのか、である。[その第3の文字とは] 霊的な <sup>フーワ</sup> W の  
 文字であるが、それは実体 ('ayn) がないにもかかわらず、かの王 [すなわち神] <sup>(41)</sup>が被造物  
 (al-mukawwan) の構造のうちにもっている痕跡/影響 (al-athar) を与えるものである。

そして彼は、この天で生成 (al-takwīn) の神秘と、イーサーが死者を蘇らせる者であることを学ぶ。鳥の姿を生み出し、その姿に息を吹き込み、鳥を飛ぶものとして生み出すのは、アッラーのお許しによるものなのか？それとも、イーサーが鳥の創造と息の吹き込みに形を与えたのがアッラーのお許しによるのか？「我の許可によって」(Q5:110) <sup>(42)</sup>と「神のお許しによって」(Q3:49) <sup>(43)</sup>という御言葉は、どの動詞と結びついているのだろうか？支配語は「なる (fa-yakūnu)」(Q3:49) と「おまえが息を吹き込む (fa-tanfukhu)」(Q5:110) のどちらなのか？アッラーの民にとって、支配語は「なる」であり、[二次的な] 原因をたてる者たち (muthbitī al-asbāb) と状態の徒 (ashāb al-ahwāl) <sup>(44)</sup>にとって支配語は「おまえが息を吹き込む」である。この天に入り、イーサーとヤフヤーのもとに集まる者には必ずそのことの知——すなわち味識 (al-dhawq) ——が得られるが、思弁の徒は得ることができない。イーサーはアッラーの霊気であり、ヤフヤーには生<sup>(45)</sup>がある。霊気と生が離れることがないのと同じように、イーサーとヤフヤーというこのふたりの預言者も、携えているこの神秘のために離れることはない。イーサーは錬金術の知においてふたつの道を持っている。[第1の道は] 生み出し/錬成 (al-inshā'), すなわち、土くれからの鳥の創造と息の吹き込みである。[鳥の] 姿が [イーサーの] 両手によって、そして

<sup>(40)</sup> ギリシャ語の *σμεῖον*, シリア語の *sīmya* からの借用語。一般的には香水などを用いた自然魔術を指すが、特に文字神秘学を指す。イブン・アラビーにとって、文字学は生者に授けられる最初の学知である [Hirtenstein 2017: 80 n60]。一方、Saifによると、イブン・アラビーにとって *sīmiyā* は魂の浄化をもたらさないような魔術 (*sihr*) に近い文字学の実践を指す [Saif 2017: 335-6]。

<sup>(41)</sup> マンスーブ版ではラームにファトハが振られており、*malak* (天使) と読んでいるが、英訳は King (*malik*) と訳しており、本稿も後者に従った。

<sup>(42)</sup> 「また、おまえが我の許可によって泥土から鳥の姿のようなものを作り、おまえが息を吹きかけるとそれが我の許可によって鳥となり」(Q5:110)。

<sup>(43)</sup> 「私はあなたがたの主からの徴を携えてあなたがたの許にやって来た。それで私があなたがたのために泥で鳥の形のようなものを創り、それに息を吹き込むとそれはアッラーの御許しによって鳥となる、ということである」(Q3:49)。

<sup>(44)</sup> イブン・アラビーは『マッカ開扉』の序文 (*muqaddimat al-kitāb*) で、知を3種類に分類している。すなわち①理性による知、②状態・体験による知、③神秘・味識による知であるが、理性が最も誤りやすく、神秘・味識による知が最も確実であるとされている [al-Mansūb 2010: 1: 123-4]。[二次的な] 原因をたてる者たちが①を重視する者を、状態の徒が②を自身の主張の根拠とする者を指すか。

<sup>(45)</sup> 生 (*hayāh*) の語根は *HYY* であり、並び替えると (ジナーズという修辞技法) ヤフヤー (*Yahyā*) の想定上の語根となることに対する言葉遊び。

飛行が息の吹込み、すなわち息吹 (al-nafas) によって現れた。これは、本章の最初で既に述べた錬金術という学知における生み出しの道である。

第2の道は発生した欠陥の除去である。生成の坩堝 (būfīqā) である子宮のなかで発生した欠陥である〔生まれつきの〕盲目やライ病をイーサーが治療したことがこれにあたる。イーサーがこれらふたつを統合したことから、自然的かつ霊的な尺度と均衡の知が追従者に得られた。この天から追従者の靈魂にたいして、「死んでいたのに我らが生かした」(Q6:122) という御言葉のように、心臓 (al-qulūb) を蘇らせる知的生が生じた。これは、あらゆるものを統合する次元である。ここには、6か月目の精液を委ねられた天使がいる。

この次元から、弁論家と〔散文〕文学者への神助 (al-imdād) が生まれるが、〔その神助は〕詩人に対してはない<sup>(46)</sup>。預言者ムハンマドはことばの総合性を持っているので、この次元から語りかけられたのである。「我らは彼（ムハンマド）に詩を教えたことはない」(Q36:69) と言われたが、これは彼が明白かつ詳細に〔教えを伝える者として〕遣わされたためであり、〔他方、〕詩は感情による (al-shi'r min shu'ūr)<sup>(47)</sup> からである。その場所は詳細化 (al-tafṣīl) ではなく、総体化 (al-ijmāl) であり<sup>(48)</sup>、明白さ (al-bayān) とは異なる。

ここから諸物の変転が知られ、ここから諸状態がその徒に授けられる。元素世界に現れる神名の奇術 (al-nīranjīyāt al-asmā'īyah) はすべてこの天からのものである。聖句箱 (al-filaqīrāt)<sup>(49)</sup> に関していえば、この次元からではない。しかし、もしそれがあるとすれば、その霊気がこの天から来ているのであって、その霊気を伴う形相の実体が来ているのではない。これらの存在物の知を得て、蘇りというのは〔復活の日まで〕長い時間がかかるのが常であるが、それが如何に速く行われるのか知ったとすれば、それはイーサーの知によるものであって、その天球で啓示された命令によるものでも、惑星の運行によるものでもない。それは、特定の序列 (al-tartīb al-khāṣṣ) に基づいた因果関係 (al-tartīb al-nisbī) を必要とする自然学における通常の道からは外れた、神の特殊な顔によるものなのである。これは理解しがたい問題である。真理を体得した知者 (al-'ālim al-muḥaqqiq) は原因 (al-sabab) 〔の存在〕を主張するし、それはもっともなことなのだが、しかし諸原因のうちのこれらの特定の序列は認めないのである。この学知を知る者はもっぱら、すべてを否定するかすべてを認めるかのどちらかなのである。時間的な序列を否定しながらも原因の存続を主張する人は今まで見たことがない<sup>(50)</sup>。それは、この天において知るこ

<sup>(46)</sup> 本項にみられるイブン・アラビーの詩学観については McAuley [2012] の第2章を参照。

<sup>(47)</sup> shi'rには、「詩」と「感情」の両方の意味がある。shu'ūrは後者の意味の複数形。

<sup>(48)</sup> 詳細化と総体化については Murata [1992: 62-66] を参照。

<sup>(49)</sup> テフィリンと呼ばれるユダヤ教の伝統において祈りの際に身に着ける、旧約聖書の句が入れられた箱。イスラームにおいては、クルアーンの節が書かれた護符を指すようになった [Hirtenstein 2017: 84:n.73]。

<sup>(50)</sup> 注33で述べたように、すべての存在者には、原因に対して向けられる顔と神に対して向けられる顔の2種類がある。原因と訳した sabab の原義は「綱・ロープ」であり、あるものと別のものを繋ぐものという観点から「原因」という意味が生じた。世界に存在するものはすべて、他のものの原因となるが、これらはいくまで二次的な原因であり、ものごとの真の原因は神である [SPK: 44]。諸々の原因を引き起こす存在である神——すなわち創造主——は、新創造 (al-khalq al-jadīd) によってこ

とができる偉大な学知なのである。長い時間をかけて原因から生まれる〔ようにみえる〕ものも、〔実際は〕かの原因から「目の瞬き、それどころかさらに近い」(Q16:77) あいだに生まれるのである。復活の日——それこそが〔真の〕誕生の日である——に生成物を顕わにするに際して大地に陣痛が訪れる前に、イーサーが行なつたと伝えられている創成 (takwīn) や鳥という被造物の創成、墓からの死者の蘇生にそれが現れている。それゆえ心を傾け、研ぎ澄ませよ。そうすればおまえの主が真つすぐな道に導き給うだろう。この天から、夜の礼拝に関する「それはさらに平坦である」(Q73:6) という彼の御言葉が〔下された〕。

追従者がこれらの学知を体得したとき、水星は自身の客人 (思弁の徒) のもとへと向かい、彼に目を向けた。そのとき、彼の天分が与える範囲でその軌道のうちに委ねられた学知を〔水星は彼に〕与えたが、それはその (水星の) 霊気ではなく、自身よりも下位の元素世界にある諸物体の性質 (al-ḥukm) であった。それが完成されたとき——それが彼の歓待であった——、彼のもとからの出立を求めた。

それから仲間の追従者のもとへ行き、ふたりは第3天を求めて旅立った。ちょうど召使が主人の先を歩くように、思弁の徒は追従者の先を歩く。自身の能力と教導者の位階を知り、彼に与えられた恩寵こそ、かの教導者への追従であることを理解したからである。

### 第3項：ユースフと金星

第3天〔の扉〕を叩いたとき、〔門が〕開かれたので、ともに昇った。追従者はユースフ (旧約聖書のヨセフ) に出会い、思弁の徒は金星に出会った。〔金星は〕彼を歓待し、語ったが、これまでの服従の惑星 (kawākib al-taskhīr) が既に語ったことだったので、彼はさらに悲嘆に悲嘆を重ねた。

金星はユースフのもとへ行つた。彼のもとには客人——つまり追従者——がいた。アッラーが特別に与え給うた想像と空想 (al-tamaththul wa-al-khayāl) の形相に関する知を〔ユースフは〕彼に投げかけた。彼は夢解釈 (‘ilm al-ta’bīr) の導師 (a’immah) のひとりであったからである。アッラーは、アードムの土くれの残りから創造した大地を彼の前に持ってきた。さらには、天国の市場 (sūq al-jannah), 光と火の霊気<sup>(51)</sup>の身体、そして至高の諸概念 (al-ma’ānī al-ulwīyah) を見せ、その均衡と尺度、関係 (nisab) と系譜 (nasab) を彼に教えた。さらに、牛の姿で年々をみせた。豊穰の年を肥えた牛の姿で、不作の年を痩せた牛の姿で<sup>(52)</sup>。知識を乳の姿で<sup>(53)</sup>、信仰

---

の世界を絶えず創造しているとイブン・アラビーは言う。世界に存在するあらゆるものは絶対者たる神の自己顕現によって顕われた像であり、一瞬一瞬ごとにそれらは神の息吹によって絶えず新しく創造され続けている。これが新創造である。新創造については井筒 [2019] 第13章, SPK [96-105] を参照。一瞬一瞬ごとに行なわれる新創造は「時間的な序列を否定」することであるが、その一方で、sababが存在することも認める立場のことをイブン・アラビーは語っている。

<sup>(51)</sup> 光の霊気が天使を、火の霊気がジンを指す。

<sup>(52)</sup> Q12:43-48 を参照。

<sup>(53)</sup> *Ṣaḥīḥ al-Bukhārī* (82) 「イブン・ウマルによると神の使徒は言った。『夢でわたしに一杯の乳がもたらされたので飲むと、それは見る見るわたしの爪から流れ出た。そこでわたしは残りをウマル・ブン・アル・ハッターブに与えた』と。人々が、これは何を意味するのか、と尋ねたとき、神の使徒



の堅固さを軛の姿で<sup>(54)</sup>。彼は感覚と感覚されるものの姿における概念と関係の受肉 (tajassud) について教え続け、そのことすべてに関する解釈 (al-ta'wīl) の意味を知らせた。〔金星は〕完全な形相化と調和の天である。

この天から詩人たちへの神助、韻律 (al-naẓm), 完成 (al-itqān), 物体のうちの幾何学的形相が下される。一方、靈魂のうちでのそれらの形相化は彼が昇ってきた天からのものである。またこの天から、完成と精緻化 (ihkām) の意味、さらには叡智を存在のうちに含んでいる美、および特定の体質にふさわしく望ましい美の意味が知られる。この天において、それ (天使) は子宮のなかにある5か月目の精液の経綸を任されている第5の代員である。

アッラーからこの天に啓示される命令から、月天球の窪みの下にある4元素の序列が生まれる。空気元素を火と水のあいだに、水元素を空気と土のあいだにおいた。この序列でなかったならば、〔4元素のなかでの〕変成が存在しなくなり、そこから生まれる生成物も生まれず、変成から現れるものも生成物のなかに現れなくなる。精液は肉、血、骨、静脈、神経へと変成するけれども、それ (精液) はどこにあるのだろうか？この天から、アッラーが肉体の発生のうちに、4つの気質 (al-akhlāt) を、最も良い構成と最も新奇な完成状態に基づいて配置した。経綸する靈魂の管轄のもとに黄胆汁を、それから血を、血に続いて粘液を、粘液に続いて死の性質である黒胆汁をおいた。この気質のうちこの驚くべき序列がなければ、医者がこの身体に起こった欠陥を取り除こうとしたり、健康を保とうとしたりするときに援助 (al-musā'adah) は届かなかっただろう。

身体が4気質に基づいているように、詩の句が基づいている4つの原則 (al-arba'ah al-uṣūl) がこの天から現れる。すなわち「ふたつの綱と杭 (al-sababān wa-watadān)」——軽い綱と重い綱、分離された (al-mafrūq) 杭と結合された (al-majmū') 杭——<sup>(55)</sup>である。分離された杭は分解 (al-tahlīl) を、結合された杭は組み合わせ (al-tarkīb) を、軽い綱は靈気を、重い綱は身体を与える。その総合によって、人間が生まれる。見よ、この世界の存在が——大世界であれマクロコスモス小世界であれミクロコスモス——なんと完成されたものであるかを。

このふたりの人物がこれらの学知を学んだ。だが、すべての天でそうであったように、追従者の方が思索者よりも〔神の〕特殊な顔がお与えになった神の知において優れていた。ふたりは、全天の心臓にあたる真ん中の天を求めて移動した<sup>(56)</sup>。

は『知識をあらわす』と答えた」〔牧野訳 1993: 48 ただし、一部の表現を変更した〕。

<sup>(54)</sup> *Ṣaḥīḥ al-Bukhārī* (7017) 「また、アブー・フライラによると、夢には、それぞれの人の思い出、悪魔の嚇し、それから神の喜びの知らせ、の3つがあるが、嫌な夢を見た人は、それを誰にも告げず、立って行って礼拝すべきである。そして夢に現れる首枷は嫌われるが、軛は信仰の堅固さを表すため、喜ばれるという」〔牧野訳 1994b: 266 ただし、一部の表現を変更した〕。

<sup>(55)</sup> 詩において、綱 (sabab) は子音2個から構成された歩脚を、杭 (watad) は子音3個から構成された歩脚を指す。軽い綱は CvC 型、重い綱は CvCv 型であり、分離された杭は CvCvC 型、結合された杭は CvCCv 型である (C は子音、V は母音の略)。堀内 [1985]; William [2005: ii358D] を参照。

<sup>(56)</sup> 『叡智の台座』イドリース章「高さには2種類ある (al-'ulūw nisbatān)。場所 (makān) の高さと地位 (makānah) の高さである。場所の高さは「そして、我らは彼を高い場所にあげた」(Q19:57) [と神は仰られた]。最も高い場所は、諸天球の世界の白が回る場所——すなわち太陽天球——である。

#### 第4項：イドリースと太陽

ふたりがそこに入ったとき、追従者はイドリース（旧約聖書のエノクと同じであるとされる）に、思弁の徒は太陽に出会った。思弁の徒には、既にこれまでも起こったようなことが起こったので、悲嘆に悲嘆を重ねた。

追従者がイドリースの御許に近づいたとき、神的諸物の変転<sup>(57)</sup>を知り、「心臓は、慈悲深き神の2本の指のあいだにある」<sup>(58)</sup>という彼（ムハンマド）の御言葉の意味と、何によって〔2本の指が〕変転させられるのかを理解した。この天において、夜が昼を、昼が夜を訪問するのを、そしてそのふたつのそれぞれがどのようにして相手に対して、時には男に、またある時は女になるのかを見た。それから、ふたつのあいだの婚姻と結合の神秘と、ふたつのあいだで生まれた夜と昼の生成物、そして夜の子供たちと昼の子供たちの違いを知った。ふたつのそれぞれが、相手のうちに生まれたものに対しては父であり、自身のうちに生まれたものに対しては母である。この天から幽玄と現象の知、御簾と顕現の知、生と死、衣服と安住、愛情と慈悲<sup>(59)</sup>の知が知られる。そして、隠れた現れの間（*al-mazāhir al-bāṭinah*）において特殊な顔から現れる「明白な者（*al-zāhir*）」という神名と、現れの間（*al-bāṭin*）の天分の性質によって外面（*zāhir*）のなかに〔現れる〕「隠れた者（*al-bāṭin*）」という神名を彼は知った。実在の違いのゆえに、外面においては名が異なっているのである。

#### 第5項：ハールーンと火星

それからふたりは第5天を求めて旅立った。追従者はハールーン（旧約聖書のアロン）のもとに、思弁の徒は火星（*al-aḥmar*）のもとへと降り立った。火星は、ハールーンに仕えているあいだは彼の客人のために席を外さなければならないことを、自身の仲間と彼の客人に謝罪した。火星がハールーンのもとを訪れたとき、彼のもとには客人がおり、開けっ広げに談笑している（*yubāsīṭuhu*）のを見た。火星は彼が談笑していることに驚き、そのことについて質問した。ハールーンは答えた。「それは畏怖と恐怖、激しさと猛威（*ba's*）の天であり、これらは締めつけ

---

そこにはイドリースの霊性の階梯がある。その下には7つの天球があり、その上にも7つの天球がある。それゆえそれは15番目の天球であり、上には火星天球、木星天球、土星天球、星宿天球、最外天球、玉座天球、高御座天球があり、下には金星天球、水星天球、月天球、エーテル球、気球、水球、土球がある」[*Ibn 'Arabī 1980: 75*]。ただしここでは火がエーテルに置き換わっている。

<sup>(57)</sup> 前項で語られた「心臓」と「変転」は同じ語根である。「心臓」と「変転」をめぐる意味的関連については相樂 [2017] を参照。

<sup>(58)</sup> *Sunan Ibn Mājah* (3834)。「創造主すなわち『慈悲深き者の2本の指のうちにそれ（心臓）はある』。心臓に対する指の変転は、2本の指の状態の変化である。これは、心臓を変転させようと彼が望んだことの変化によるものである。それゆえ、『自身／自分の魂を知る者は彼の主を知る』。2本の指を（神の）慈悲へと結びつける神の示唆に基づく指のハディースにおいて、変転はある慈悲からまた別の慈悲へだけなのである。たとえ変転の様々な種類のなかには試練もあったとしても。その合間には、彼からは隠された慈悲があり、真理なる神だけが知っている。それゆえ、2本の指とは慈悲深き神の指なのである」[*al-Manṣūb 2010: 9: 299; Hirtenstein 2017: 93: n102*]。

<sup>(59)</sup> Q30:19-21; 2:187。

(al-qabd) を必然的に伴う属性である<sup>(60)</sup>。この者は客人である。彼は預言者の追従者のうちのひとりとしてきているので、敬わなければならない (tajibu karāmatuhu)。彼は知を望み、心によぎるものの敵から逃れすぎるための神的権能 (ḥukm ilāhī) を求めてやってきた。彼の師 (sayyid) が定めた諸法度を超えることを恐れているのだ<sup>(61)</sup>。それゆえ、聖霊 (rūḥ quds) <sup>(62)</sup>による靈魂の開き (bast) によって、彼が求めていることを受け入れられるように、私はその（諸法度の）様相を彼に明らかにし、彼と開けっ広げに談笑しているのだ。

それから彼（ハールーン）は彼（追従者）に顔を向け、こう言った<sup>(63)</sup>。「これは人間 (al-bashar) の代理者性の天である。その導師の権限 (ḥukm) は弱い、その根源は強固な建造物である。暴君や抑圧者たちに対して物腰柔らかくなる (bi-al-līn) よう命じられている。それゆえ、我々に対して『おまえたちふたりは彼（フィルアウン、ファラオ）に物腰柔らかい言葉で話せ』 (Q20:44) と語られている。物腰柔らかく話すよう命じられているのは、使徒として遣わされた者よりも大きな力を持ち、さらに威力のある者<sup>(64)</sup> [に対して] だけである。

だが、真理なる神が暴虐 (al-jabarūt) と高慢 (al-kibriyā) を顕わにする心をすっかり封じ給い<sup>(65)</sup>、彼（フィルアウン）は魂において謙虚な者たちのなかでも最も謙虚なものである<sup>(66)</sup>ことを教えたので、ふたり（ムーサーとハールーン）は、慈悲と物腰の柔らかさをもって彼に接するように命じられた。そうするのが彼の内面にふさわしく、彼の外面が暴虐と高慢から免れられるからである。『彼も（訓戒を）思い出すか、懼れるかもしれない』 (Q20:44)。だが、アッラーのいう「かもしれない (la‘alla)」や「たぶん (‘asā)」は、必然である。それゆえ、我々が物腰の柔らかさと阿り (al-maskanah) をもって接したことによって、彼（フィルアウン）は内面のあるがままの状態を思い出し、外面と内面が等しくなった。

望まれたことを必ず引き起こす神の望みによって、それは酵母のように彼の内面で作用し続けた。[ムーサーに] 追従することへの [フィルアウンの] 絶望 (ya‘s) が絶たれるまでその力 (ḥukm) は強くなり続け、ついには溺死によって彼の欲望が妨げられた<sup>(67)</sup>。そして、神のご満足が信仰者たちのもとで実現するように、彼は内面に隠されていた謙虚さと欠乏 (al-dhillah wa-al-iftiqār) に縋った。それゆえ彼は『イスラームの子孫が信じた御方を私は信じた。そして私は帰依する者である』 (Q10:90) <sup>(68)</sup>と言い、彼は自身の内面の状態と、心のなかにあった神に

<sup>(60)</sup> 「締めつけ」と同段落中の対義語「開き」、およびそれらに関連する神と人間の属性については Murata [1992: 69] を参照。

<sup>(61)</sup> 「そしてアッラーの諸法度を超える者は己自身に不正をなしたのである」 (Q65:1)。

<sup>(62)</sup> 天使ジブリール (ガブリエル)。

<sup>(63)</sup> この会話文は21頁の第3段落途中まで続く。

<sup>(64)</sup> 「彼ら（過去の民）は彼ら（マッカの多神教徒）よりもさらに威力があり」 (Q50:36) を暗示している。

<sup>(65)</sup> 「アッラーは高慢で暴虐な者の心をすっかり封じ給う」 (Q40:35)。

<sup>(66)</sup> Miftāf [2009] によれば、ハールーンに関わる神名は al-Mudhill (謙虚にする者、屈辱を与える者) である。

<sup>(67)</sup> Q10:71-74。

<sup>(68)</sup> ただし、「イスラームの子孫が信じた御方以外に神はないことを私は信じた」の下線部が欠けている。

ついで正しい知識を明らかにしたのである。『イスラエールの子孫が信じた御方』と言ったのは、曖昧なこと (al-ashkāl) に関して疑い (al-ishkāl) を取り除くためである。ちょうど魔術師たちが信仰したとき、『我らは諸世界の主を信じました。ムーサーとハールーンの主を』(Q7:121-2; 26:47-8) ——つまりふたりが〔信仰するよう〕呼びかけた御方を——と言ったのと同じように。というのもそれは疑いを取り除くためになされたからである。『そして私は帰依する者である』(Q10:90) という言葉は、いと高き彼が聞き、見る者であることを知っていたがゆえの真理なる神への語りかけである。そして真理なる神は非難の言葉で彼に語りかけ、聞かせた。『今になって』おまえは知っていることを明らかにした。『おまえはかつて以前、反抗し、』自分の追従者たちに対して『害悪を為す者たちのひとりであった』(Q10:91) と。だが、『おまえは害悪を為す者たちのひとりである』とは言わなかった。

これは彼に対する福音の言葉であり、行き過ぎ (isrāf) や侵犯 (ijrām) があつたとしても我々が彼 (神) の慈悲を求めることができるよう、我々に教えられた。それから彼は仰った。

『それで今日、我らはおまえを救う』——彼の靈気を締めつける<sup>(69)</sup> (qabd) 前に彼に福音を伝えた——『おまえの代理となる者への徴となるように、肉体を』(Q10:92)。すなわち、おまえの後に来る者にとって、救いが明白な徴 (āyah) となるように。もしおまえが述べたことを彼が述べたならば、おまえと同じような救いが彼に対してもある、ということである。来世の猛威が消えることもなく彼の信仰も受け入れられないということが、その節 (āyah) で言われているのではない。その節で言われているのは、現世の猛威を見て信仰したとしても、現世の猛威が、それを下された者から消えるわけではないということである。ただし、ユースス (旧約聖書のヨナ) の民は別である。『それで今日、我らはおまえの肉体を救う』という彼の御言葉 [が下された]。というのも、懲罰はおまえの外面だけにしか関わらないからであり、懲罰からの救いが人間に対して示された。溺死のはじめは懲罰だが、そこでの死は、破戒 (ma'ṣiyah) の混ざらない純粹で無垢な殉教 (al-shahādah) となった。最も良い行ない、すなわち信仰の表明 (al-talaffuz bi-al-īmān) のさなかにそれ (フィルアウンの靈気) は締めつけられた。それらすべては、神の慈悲に誰も絶望しないように [なされた]。行ないは結末 (khawātim) による。神への信仰は、彼の内面を彷徨いつづけた。人間への神の本体的な封印 (al-ṭābi') が高慢さと人間の精妙体 (al-laṭā'if) <sup>(70)</sup>のあいだを妨げたので、高慢さが入り込むことは決してなかった。

『だが、彼らの信仰は、彼らが我らの猛威を見た時には彼らに益しなかった』(Q40:85) という御言葉は、明白さの極みにある真理を体現したことばである。ご利益を与える者 (al-nāfi') とはアッラーである。彼らに益するものとはアッラー以外にはない。『下僕たちにおいてすでに過ぎ去ったアッラーの慣行である』(Q40:85) という御言葉は、常ならざる猛威をみたときの信仰を意味している。『アッラーにこそ諸天と地にある者は、喜んで、また嫌悪しながらも跪拝する』(Q13:15) と仰った。この信仰の最低限は、嫌悪しながらも〔信仰する〕ことであり、真理なる神は、崇高なる彼自身にそれを結び付けた。嫌悪が占める場も心臓であり、信仰が占める

<sup>(69)</sup> 靈気を) 締めつけるとは、神がその人から生命を奪うことの云いである。

<sup>(70)</sup> すなわち靈魂。

場も〔また〕心臓だからである。アッラーが下僕に対して、困難な行ないをするよう命じるのは、それが彼にとって困難だからではなく、彼への報酬を倍増させてくださるためである。この場合、彼（フィルアウン）の困難は遠い。むしろ喜んで信仰に入ったが、そのあとも生きることができなかった。他方、荒波のときに海を渡る者に対しては『おまえたちが祈る者は彼（アッラー）以外にははぐれ去った』（Q17:67）と仰られ、彼らをお救いなさった。もし救ったときに彼らを締めつけていたら、彼らには救済が与えられ、一神教徒として死んでいただろう。

彼はフィルアウンを締めつけたが、彼がかつての主張に戻らず、信仰ある状態で死ぬるよう死を猶予し給わなかったのである。この物語を完結させるために、『まことに、人々の多くは我らの諸々の徴に対して不注意な者たちである』（Q10:92）との御言葉が〔下された〕。あなたは救済を徴——つまり、救済の到来への明証——として明らかにされたが、ほとんどの人はこの徴に対して不注意で、かの信仰者には災難が与えられたと思い込んでいる。『彼らを獄火に連れ下る』（Q11:98）という御言葉は、彼が彼らとともにそこに入ることを明示しているのではない。そうではなく、アッラーは『フィルアウンの一族を〔最も厳しい懲罰に〕入れよ』（Q40:46）と仰ったのであり、『フィルアウンと彼の一族を入れよ』とは言われなかった。アッラーの慈悲は、余儀なくされた者（al-muḍṭar）の信仰が受け入れられないことがないほど広い。溺れたときのフィルアウン以上にどんな余儀のなさがあるだろうか？アッラーは『（偶像神が良いか、それとも）余儀なくされた者が彼に祈ったとき、その者に応え、災難を取り除き給う御方（のほうが良い）か？』（Q27:62）と仰り、余儀なくされた者が祈ったとき、応答を彼に結びつけ、彼から災難を取り除いた。このような者は、純粋にアッラーを信仰している。彼は不慮の事態（al-ʿawārid）を恐れて、あるいはこの状態で訪れたこの至誠（al-ikhḷās）が妨げられることを恐れて、現世での存続を求めなかった。彼（フィルアウン）は信仰の表明によって、〔現世での〕存続よりもアッラーに会う方を優先させた。〔アッラーは〕その溺死を『来世と現世の見せしめ』（Q79:25）とした。最も良い属性で彼を締めつけたので、彼の懲罰は口焼く水（al-māʾ al-ajājī）の悲嘆以上のものではなかった。これこそが語の外側〔的な意味〕を示している。これが、『まことに、そこには懼れる者への教訓がある』（Q79:26）という御言葉の意味である。つまり、彼を捕えたことのうちに『来世と現世の見せしめ』（Q79:25）がある。来世への言及を最初に、そして現世の言及を最後にしたのは、その懲罰が、つまり溺死という懲罰が来世の見せしめであることを知らしめるためである。それゆえ、現世よりもそれについて先に語った。これこそが『大いなる御恵み』（Q8:29）である。見よ、近しき者（walī）よ、物腰柔らかい語りかけが何をもたらし、これらの果実がどのように実を結んだのかを。

あなたは——ああ追従者よ——諸々のことにおいて物腰柔らかくであらねばならない<sup>(71)</sup>。高貴な魂は性向（al-istimālah）に従うのだから。それから〔ハールーンは〕仲間——思弁の徒——に対して親切にするように彼に命じた。ハールーンがこのように命じたのは、ムーサーが彼の頭を掴んで引っ張ったときに、これが彼自身の味識（dhawq）として起こったからである。あご

<sup>(71)</sup> ヘルメス文書の古い格言である [Ruspoli 1981: 87:n2]。

髭<sup>(72)</sup>と前髪を掴んだことで、[ムーサーはハールーンに] 恥辱を味わわせた。[ハールーンは] 両親のうちでより哀れみ深い方の名を出して彼に呼びかけ、「私の母の息子よ、私のお髭や頭を掴むのを止めよ」(Q20:94)と言った。また、彼の弟ムーサーが征圧 (al-qahr) の属性を持って現れたときには「私のことで敵たちを喜ばせるな」(Q7:150)と言った。ハールーンは謙虚な／卑しい性格 (dhillat al-khuluq) を味識として持っていたので——もともと彼は自身が卑しめられているものから潔白であったが——、恥辱 (al-madhallah) が倍増した。それゆえ彼は血縁関係 (al-ruhm) に基づいて彼に呼びかけた。これが、この追従者への彼 (ハールーン) の助言 (waṣīyah) の理由である。

もしムーサーが書板を投げつけていなかったならば、兄の頭は掴んでいなかっただろう。その[書板の]文書には、ムーサーへの訓戒として導きと慈悲があるからである。[そうなれば、]慈悲をもって兄に接していただろうし、導きによって彼の民に関する問題は明らかになっていただろう。「彼から怒りがおさまると、彼は書板を取り上げた」(Q7:154)<sup>(73)</sup>。書き込まれたもののうち、彼の目にとまったのは導きと慈悲だけであった。彼は「わが主よ、私と私の兄弟を赦し、我らをあなたの慈悲のうちに入れ給え。あなたは慈悲深い者たちのうちで最も慈悲深い御方」(Q7:151)と言った。それから、[ハールーンは]彼(追従者)に対して、供物と犠牲獣の血を流すよう命令した。[流血は]彼の天が必要としているものであり、[それによって]動物が人間の度合いに辿りつけるように[命令された]。それ(人間の度合い)にのみ信託 (al-amānah) の完全性があるからである<sup>(74)</sup>。それから、彼(火星)は自身の客人への贈り物 (khil'at al-nazīlihi) を携えて彼の元から離れた。そして仲間(思弁の徒)の手を取った。それからできる限りで神知を彼に伝えたが、[火星という惑星の]回転においてその性質が許す限りであってそれ以外のものは伝えられなかった。

参考文献 ([ ]内, 略記)

杉田英明 1996. 「天路歷程譚の系譜」蓮實重彦, 山内昌之(編)『地中海 終末論の誘惑』東京大学出版会, 115-132.

相樂悠太 2017. 「イブン・アラビー思想における「心」(qalb)と「変転」(taqallub)の意味連関: 先行スーフイーとの比較を通じて」『オリエント』60(2), 196-207.

澤井真 2020. 『イスラームのアダム 人間をめぐるイスラーム神秘主義の源流』慶応義塾大学出版会

上智大学中世思想研究所・竹下政孝編訳＝監修 2000. 『中世思想原典集成 11 イスラーム哲学』

<sup>(72)</sup> お髭と訳した lihyah の語根である LHY には侮辱の意味がある。なお、ハールーンと侮辱の内的連関については Miftāh [2009: 65-69] を参照。

<sup>(73)</sup> ただし、クルアーンでは「彼から」ではなく「ムーサーから」になっている。

<sup>(74)</sup> 「まことに、われらは諸天と地と山々に信託を提示したが、それらはそれを担うことを拒み、それに対して怯んだが、人間がそれを担った」(Q33:72)。

平凡社

- 中田考監修 2014. 『日亜対訳 クルアーン』 作品社
- 花田宇秋 1984. 「イスラムの昇天物語」『明治学院大学一般教育部附属研究所紀要』 8, 149-171.
- 牧野信也訳 1993. 『ハディース イスラーム伝承集成（上巻）』 中央公論社
- 牧野信也訳 1994a. 『ハディース イスラーム伝承集成（中巻）』 中央公論社
- 牧野信也訳 1994b. 『ハディース イスラーム伝承集成（下巻）』 中央公論社
- ‘Ajam, Rafiq. 1999. *Mawsū‘at muṣṭalahāt al-tāṣawwuf al-Islāmī*, Beirut: Maktabat al-Lubnān.
- Casewit, Yousef. 2017. *The Mystics of al-Andalus: Ibn Barrajān and Islamic Thought in the Twelfth Century*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Chittick, William C. 1989. *The Sufi Path of Knowledge: Ibn al-‘Arabī’s Metaphysics of Imagination*, Albany: State University of New York Press. [SPK]
- Chittick, William C. 1998. *The Self-Disclosure of God: Principles of Ibn al-‘Arabī’s Cosmology*, Albany: State University of New York Press. [SDG]
- Gril, Denis 1988. *Le Livre de l’Arbre et des Quatre Oiseaux d’Ibn ‘Arabī (Risālat al-Itihād al-Kawnī)*, Paris: Les Deux Océans.
- Gril, Denis 2007. “L’Interprétation par transposition symbolique,” in Bakri Aladdin (ed.), *Symbolisme et Herméneutique dans la Pensée d’Ibn ‘Arabī*, Damascus: Institut français du Proche-Orient.
- Hirtenstein, Stephen(tr.) 2017. *The Alchemy of Human Happiness*, Oxford: Anqa Publishing.
- Ibn ‘Arabī, Muḥyī al-Dīn 1980. *Fuṣūṣ al-ḥikam*, ed. by Abū al-‘Alā ‘Affī, Beirut: Dār al-Kitāb al-‘Arabī.[FH]
- Ibn ‘Arabī, Muḥyī al-Dīn 2010. *Tanazzul al-amlāk min ‘ālam al-arwāḥ ilā ‘ālam al-aflāk*, ed. by al-Shaykh ‘Abd al-Wārith Muḥammad ‘Alī, Beirut: Dār al-Kutub al-‘Ilmīyah.
- Jaffray, Angela 2006. *The Universal Tree and the Four Birds*, Oxford: Anqa Publishing.
- Khvājavi, Muḥammad(tr.) 2006. *Tarjameh-ye Futūḥāt-e Makkīyah*, 17vols., Tehran: Enteshārāt-e Mūlā.
- al-Manṣūb, ‘Abd al-‘Azīz Sulṭān(ed.). 2010. *al-Futūḥāt al-Makkīyah*, 13vols., Yemen: Wizārat al-Thaqāfah Jumhūrīyah al-Yamīnīyah.
- McAuley, Denise E. 2012. *Ibn ‘Arabī’s Mystical Poetics*, Oxford, Oxford University Press.
- Miftāḥ, ‘Abd al-Bāqī 2009. *al-Mafāṭīḥ al-wujūdīyah wa-al-Qur’ānīyah li-kitāb Fuṣūṣ al-ḥikam li-Ibn ‘Arabī*, Beirut: Dār al-Kutub al-‘Ilmīyah.
- Miftāḥ, ‘Abd al-Bāqī 2018. *al-Ḥaqā’iq al-wujūdīyah al-kubrā: fī ru’yat al-Shaykh al-Akbar Muḥyī al-Dīn Muḥammad ibn al-‘Arabī*, Irbid: ‘Ālam al-Kutub al-Ḥadīth.
- Murata, Sachiko 1992. *The Tao of Islam: A Sourcebook on Gender Relationships in Islamic Thought*, Albany: State University of New York Press.
- Ruspoli, Stéphane(tr.) 1981. *L’Alchimie du Bonheur Parfait*, Paris: Berg International.
- Saif, Liana 2017. “Ġāyat al-ḥakīm to Šams al-ma‘ārif: Ways of Knowing and Paths of Power in Medieval Islam,” *Arabica* 64-3/4, 297-343.
- Schimmel, Annemarie 1982. *As Through a Veil: Mystical Poetry in Islam*, New York: Columbia University Press.

Shams al-Dīn, Aḥmad(ed.) 2006. *al-Futūḥāt al-Makkīyah*, 9 vols., Beirut: Dār al-Kutub al-‘Ilmīyah.

sunnah.com (<https://sunnah.com/> : 最終閲覧 : 2023 年 1 月 31 日)

Ullmann, Manfred 1972. *Die Natur- und Geheimwissenschaften im Islam*, Leiden: Brill.

Wright, William 2005. *Arabic Grammar*, 3ed. 2vols., New York: Dover.

東京大学大学院人文社会系研究科イスラム学専修修士課程

Master Student, Graduate School of Humanities and Sociology, the University of Tokyo